



1944-1951

六甲蹴球部の誕生



昭和24年11月11日、六甲高校サッカー部。後列左より、平本・谷田・水谷・小椋・久島・本地
中列左より、松浦・藤岡・由谷
前列左より、宮原・白井・小倉・安田

11人の船出

懐かしい友、小椋君よりそれこそ何十年ぶりの電話をもらったのが、4月14日の事である。お互いの近況や旧友の消息等の会話を楽しんだ後、突然彼より母校六甲の蹴球部の創立50周年を迎えるに当たり、一筆投稿せよとのリクエストである。その上、キャプテンであった一名ばかりのキャプテンそれも初代のキャプテンであった君の義務でもあると云う。もともと作文なるものが最も苦手である小生ゆえ、とんでもないと固辞したが、結局口説かれて書くことをお引き受けすることにし

た。

米軍の影響もあってか野球部が数ある運動部の中の花形でなにかにつけ脚光を浴びていたが残念ながらヨーロッパ南米では盛んであったサッカーは若者の間では今一つ人気がなく我が母校にもサッカーなるチームは存在していなかった。今にして思えば恐らくヨーロッパ出身の多い先生方やブタコックさんは野球などよりサッカーの方がずっと面白いのにと心ひそかにサッカー部の誕生を鶴首していたに違いない。そこに少しへそまがりなグループが野球部に対抗意識を燃やしてつくったのが六甲における蹴球部の誕生である。

このグループの面々は宮原、小椋、小倉、安田、谷田、白井、藤岡の諸公に筆者を加えて7期生の8名である。これに当時のサッカーの名門神戸高校から転校してきた名選手松浦君ら下級生の参加をえてやっと11名にして船出したのが昭和23年のことであった。我々8名の中でサッカーに最も熱中したのは谷田君でまさに好きこそ物の上手なれで我々チームのポイントゲッターは谷田・松浦の両君であったと記憶している。守備面ではボールデンこと宮原君が長身を生かしての名ゴールキーパーとして鳴らしたものである。この攻守のまとめ役で常に冷静なプレーぶりを発揮したのが小椋君であり、またこ



昭和24年9月11日、国体サッカー兵庫県予選。於、西宮グラウンド

の生まれだてのチームを陰になり日向になり応援してくれたのがかの有名な六甲名物ブタコックさんである。ゴルフアのスタッドラーの様な巨漢で一見すごく怖そうに見えるが心の優しいブタコックさんは練習の時は声を大にして激励してくれ試合ともなれば常に応援にかけつけてくれた心底サッカーを愛した御仁で我々蹴球部の心の支えであったと思うのは小生一人ではないと思う。このブタコックさんが誰よりもチームメートの中で好きだったのが、安田君である。この安田君はまれにみる健脚の持ち主で何回目の強歩大会か忘れたが有馬越えの60Kmのコースを3時間そこそこで完走し2位を大きく引き離し見事優勝したため、これで当時の体操の増田先生がサッカー部の存在を大いに評価してくれたものである。その増田先生もブタコックさんも既に他界されて久しいがいつも天国で六甲のサッカー部を見守ってくれていると思う。創部最初の公式試合を母

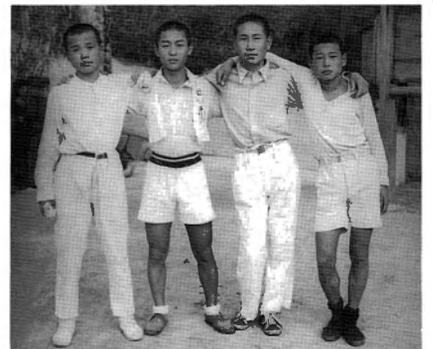
校の一番上のグラウンドで伊丹高校を相手に対戦し1対0で勝利をおさめたと記憶しているがそれから今まで母校のサッカー部は何試合ぐらいしているのだろうか、また戦績はどうなんだろうかと、機会あれば知りたいものだと思っている。

筆者はその昔、職業柄ハンブルク、ロンドン、ミラノと駐在を経験したが、これら大都市には各々伝統のある古いサッカーチームがあり他の都市チームとの試合が行われる度に随分熱狂して応援したものである。矢張り自分が学生時代に少しでもやった事のあるスポーツには特別に魅力を感じるもので試合の都度に興奮していたことを覚えているが現地のサッカーファンの熱狂ぶりは日本のプロ野球ファンの比ではなく言葉は悪いが全くクレージーとしか言い様のない程である。それだけサッカーには男の血を湧かせる何ものかがあるのではなからうか。来年には日本

にもプロのサッカーリーグが誕生すると聞いているし、これからわが国でも益々サッカーは盛んになる事間違いないと思う。サッカーを通じて得る精神的・肉体的プラスは人生の至る所で役立つものである。

最後に先輩として母校サッカー部の創立50周年を迎えるに当たり心よりお祝い申し上げますと共にサッカー部の今後の益々の発展を祈ってやまない。

[水谷 五郎]



サッカー部は、第7回競歩大会でも大活躍。